

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間（平成26年度第1回研究会）

報告者：宮原暁 AA 研共同研究員（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）

報告タイトル：移動する身体と空間

1. 人類学における空間論への関心

ポスト近代における世界の景観をどう描くかという課題は、人類学にとって今日的な課題の一つとなっている。フィールドワークと同じ地平に立ち現れる（はず）の、人々のアクチュアルな日常の実践を手がかり、足がかりに、その重層的な配置を通して現れる社会空間の像にこそ、「近代」に上書きされた人の生についての別の読みが見つかる、と素朴に信じられるようになったからだ。

だがこうした企てがめざすところを全うするのは、そう容易いことではない。フィールドワークの命脈は、対象との「近さ」、あるいは「場の共有」ということにあるが、「近さ」や「場の共有」が何によって保証されるのかは必ずしもはっきりしない。「対象に寄り添う」と謳う民族誌の数々は、単に物理的な距離を民族誌的距離（ラポール）に置き換えたものでしかなく、フィールドワークにもとづく日常の実践の説明は、「近代」の枠組みに基づく説明を異なった角度から言い換えたものにすぎないとすら思えてくる。

空間をめぐる議論でしばしば強調される「場所」と「空間」の区別も、この問題に関係している。「場所」と「空間」は、英語における **place** と **space** の区分に従って、物理的、地理的な広がりとしての「空間」と、政治的、文化的な相互行為の結果生ずる「場」に区別される。しかし、この区別は、そもそも純粹に物理的、地理的な広がりとしての空間が想定できるのか、という点で必ずしも本質的ではなく、文化的空間としての「場」、およびフィールドワーカーとフィールドとの関係に、特権的な位置づけを与えてしまうという意味では、注意が必要である。フィールドワークでは、「場」への「近さ」が一つのキーワードとなるが、もとより「近い」「遠い」は、二項対立的に把握できるものではなく、空間の重層性を通して理解すべきものであろう。

ポスト近代的空間を読むとする試みが持つこうした問題性は、「移動」というテーマを視野にいれたときに一層はっきりする。アクチュアリティを追求するフィールドワーカーは、当の実践が繰り広げられる「空間」「場所」「環境」にひとかたならぬ関心を払うが、「場所」という語に特権的な意味をもたせることで、「移動」は「定着」を常態とする二項対立のなかからみとられてしまう。人は移動することでいくつもの「空間」「場所」「環境」と横断的

にかかわり、一定の「空間」「場所」「環境」に占める人口を増減させる。「移動」は、近代の図式においても、またアクチュアリティを追求するポスト近代の図式においても、「空間」「場所」「環境」によって占められた座標軸のなかに書き込まれがちだが、「空間」「場所」「環境」を横切ることで、それは座標軸そのものの転換をも迫るのだ。

こうした問題意識を背景として、本報告では、空間に関するハイデガーの議論を、四日谷の論考にもとづきつつ参照し、人口移動をとりまく空間的な構えがどのようなものであり得るかについて検討する。そうすることで「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」プロジェクトの主要な課題の一つである「中国系の人口移動がその重層的な配置を通してどのような社会空間を生み出してきたか」という問いに答えるための方法論的検討を行うとともに、事例研究をすすめるうえでの仮説を提示しようというのである。

こうした企てを行ううえで、移動によって生成される社会空間に予め何らかの名前を与えておくことは重要である。本報告では、そうした空間を「ディアスポリック空間」と名づけ、その生成の仕方を問うことで中国系移民研究における新たな課題を展望しようとする。

1. 「生きられる空間」

人々の日常的実践の重層的な配置を通して現れる社会空間の理解は、哲学、建築学や都市工学、文化地理学等の分野で様々な議論がなされてきた。

なかでもハイデガーの「生きられる空間」をめぐる議論は、「空間」と「場所」の間に区別を設けないドイツ語の用語法に従いながら、人が身体をもちながら、同時に空間としての身体や建築を経験する仕方を明らかにしている。ここでは、「生きられる空間」に関する四日谷の著書『建築の哲学—身体と空間の探求』に依拠して、この点を簡単にまとめてみよう。

四日谷によれば、ハイデガーにおいて空間は、『存在と時間』において均質な自然空間の意味で用いられているのに対して、「物」や「建てる・住む・思惟する」において「生きられる空間」として解釈し得るといふ（四日谷、2004: 141）。

まず四日谷は、『存在と時間』のなかから、後の「生きられる空間」へとつながっていく思考を次のようにとりだす（四日谷、2004: 146-147）。

- (1) 生きられる空間は、自然科学的な幾何学的空間から区別される。
- (2) 幾何学的空間は、生きられる空間の「脱世界化」によって、つまり生きられる空間を現存在の廻りの世界たらしめている有意義性が捨象されることによってそしてその三次元的な広がりだけが主題化されることによって成立する。
- (3) 幾何学的空間は、どこも等質、等価であり、唯一の空間としてあり、対象化可能である。
- (4) それに対して、生きられる空間は、何よりもまず唯一の空間として直前的にあるのでは

なく、複数の諸空間としてのみ考えられる。そしてそれらの諸空間は常に動的に生起し、開示されるものであって、対象化されない。というのは、生きられる空間は、現存在のあり方を規定する実存疇であり、現存在がもともと空間的であって、自らの生の「何のため」に基づいて、つねにすでに廻りの世界を開きつつ実存していることに由来するからである。

- (5) ただ『存在と時間』で「廻りの世界」として考えられた生きられる空間は、あまりに現存在中心的に過ぎると言わざるを得ない。そこでは自然さえも、現存在の「何のため」に向けて有用性に変えられた自然しか問題とならない。

こうした『存在と時間』での現存在中心的な「生きられる空間」に対して、後期のハイデガーにおいて、「生きられる空間」は、現存在の有用性から離れていく、と四日谷は述べる。

『思惟とは何の謂いか』において、ハイデガーは、「表象作用とは本来いかなる事態かを追求するために、まず科学の外部に建ち、一本の花咲く木の前に立つ。すると眼差しの逆転とも言ふべき事態が生起し、われわれが木を表象し、前に立てるのではなく、むしろ木がそれ自身を我々の前に立てるということ、そして木と我々とのこのような〈互いの方へー互いの前へ〉という関係のうちで、木とわれわれが真実に在ることが生起する（中略）われわれは科学から『われわれがそこで生きかつ死ぬ当の地盤の上へ』跳躍したのである」と述べる(四日谷、2004: 148)。

「生きられる空間」では、「真実に物が物となり、世界が世界となる」(ハイデガー「物」)が、こうした空間は、「測定可能な量的な『隔たり』の減少」によって担保されている訳ではない。数学的＝幾何学的に測定可能な空間としての「隔たり」は、どこも等質、等価で、近くも遠くもない(四日谷、2004: 146)。

2. 「生きられた身体」

「生きられた空間」のなかに人口移動をとらえるためには、身体の問題に分け入っていく必要がある。

四日谷は、「生きられた空間」と身体との関係について、「身体は、それ自身の廻りの『生きられる空間』と密接に関連している」とともに、「空間のなかにあり、空間を占めている」と述べる(四日谷、2004:142)。

こうした身体の「空間を産出するとともに、空間を占める」あり方は、「世界を変容させる場としての身体」(世界を新たに分析化し、「節合」する場所)に近い(ド・セルトー、1987)。

ド・セルトーの『日常実践のポイエティック』（1987）における身体論に拠りながら、三上は、そこで身体は「都市のパノプティコン的構成と権力（都市計画的なデウスクルと「偏視する権力」）に対して、「歩行者」が作り出す「発話行為」としての自由な歩行が空間に細工を加え、空間を相手として戯れる」としている（三上、2005: 44）。

また移動の一つのあり方として、「歩行」を取り上げ、それが「空間を文体的に変貌させる身振り」であり、近代社会の形成過程で「書き込まれ」分離され、「個人の身体」へと分節化された身体そのものを拒絶する営み、であるとしている（同上）。

3. 「生きられる空間」と移動

（1）移動と「近さ」

このように身体を経由させつつ、移動と空間の関係について考えてみると、身体が「生きられる空間」のなかを移動することで、「近さ」がゆらぎ、その都度、「生きられる空間」が更新されていくプロセスを想起することができる。

このプロセスは、移住の当初からはじまっているが、素材や技術、また権力の問題等のために、移住者は居住地において「本来的に住むこと」をめぐる困難さに直面する。これは、居住空間としての建造物のみならず、身体をとりまく空間としての衣服や調度に関しても、同様の困難さが生じる。この困難さ、あるいは「他者性」こそが、移動に関する研究の焦点の一つとなろう。居住地でのこうした他者性は、同時に故郷との「近さ」を生み出す。「生きられる空間」は、居住地と故郷の間で二重化されるのである。

（2）「歩行」としての移動

中国系移民の移動において、ド・セルトーのいう「歩行」になぞらえることのできるものは、どのようなものだろうか。

中国系移民を対象とするこれまでの人類学的研究では、中国系の人口移動の中に、パーソナルな移動や、予測不可能性を観ることはなかった。しかし、いかなるタイプの人口移動も、それが大上段に構えた目的に付随して、いくつかの些細な、しかし、同時に「空間を文体的に変貌させる身振り」や、近代社会の形成過程で「書き込まれ」分離され、「個人の身体」へと分節化された身体そのものを拒絶する営みを発見することができるのではないだろうか。

例えば、人口移動にとって一見重要には見えない携行品などがそれにあたる。また、今日的には、彼らの旅行や観光が持つ意味も、人口移動が当初持っていた意味を変更するという意味で重要であろう。

4. 中国系人口移動の特殊性

中国系移民の人口移動が生み出す「生きられる空間」と「身体」は、それが 19 世紀の半ばから 20 世紀の初頭にかけて顕著に観られたという意味で、近代における空間の様式と近代的な身体の管理という枠組みのなかで、さしあたり理解することができる。今日（1990 年代以降）、こうした近代との関係でとらえることのできる移動と空間は、「消費」という観点を交えて解釈することも、あるいは可能であろう。

しかし、中国系の人口移動は、こうした空間のなかに生ずるとともに、移動を通して空間と身体を生成する。すなわち、中国系の人口移動と身体は、近代社会やポスト近代的な消費社会のなかに位置づけされるとともに、それらを生成しもするのである。そうして生成された「世界」は、「近代」の一部をなす。中国系人口移動は、「世界史」を背景として生起するばかりではなく、「世界史」のフォーマットを創生しもするのである。

こうした「生きられる空間」から世界（社会空間）が生起する契機となるものは、どのようなものが考えられるだろうか。Tim Ingold は、人が「うろうろ」する経験の蓄積が、移動の空間を生み出すと示唆している。「生きられる空間」のなかを「うろうろ」(Wayfaring) する軌跡の道すがら、知識が統合されていくプロセスに、人口移動の真の意味が発見できるというのである (Ingold, 2011)。

とは言え、こうした Wayfaring の密度と総延長、物語を通じた知識の統合だけで、世界史の創造が可能かと言えば、そうではない。むしろ、幾世代にも亘る移動の蓄積が、「生きられる空間」を同期する装置として、物語や貨幣に加え、建築に類する空間としての家族や国家、同郷会、宗親会・・・) を生起させ、そのなかを人が移動することで近代、さらにはポスト近代の創出に加担していると仮定した方がよいだろう。

中国系の移動に関する人類学的な研究の方法論と仮説も、こうした思考にもとづいて見いだせるであろう。

5. 課題と展望

中国系の人口移動をとらえる新たな枠組みをめぐってあれこれ考えてきたが、それを通して、次に挙げるような理論的な課題と展望も見えてくる。これらの点を指摘して本報告を終えることとしたい。

(1) 「近さ」(「人間に真の意味で「生きる」ことを授ける空間) は、縮小しているのか、拡大しているのか。「近さ」の基準となるのは、意味なのか、実践なのか。アフォーダンスやハヴィトゥスも関与しているのか。

(2) 人類学は、他者における「近さ」を理解しようとし、フィールドワークでは、「近さ」の共有がデータの拠り所となってきた。こうした「近さ」の信仰を取り払ったとき、フィールド

ワークはどのようなものに進化するのだろうか。

(3) 今日、通信技術等の進歩によって、日常に「近さ」が飽和している状態、あるいは人が過剰な「近さ」に翻弄される状態が生じつつある（とも言える）。もし、そうだとすれば、情報や技術、制度が「生きられる空間」に対して持つ意味とは、どういったものだろうか。逆に、「生きられる空間」は、どのようにして情報や技術、制度をその内に、招き入れるのだろうか。もしそうでないとしたら、通信技術などによって獲得された見せかけの「近さ」と、真の「近さ」の間にある区別は、どのように画することができるのだろうか。また、「生きられる空間」とは別個に生起することとなる情報、技術、制度は、どこで、どのように産出されるのだろうか。

文献：

四日谷敬子 2004『建築の哲学—身体と空間の探求』世界思想社

ド・セルトー、ミシェル 1987『日常実践のポイエティック』国文社

西井涼子 2006「社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子・田辺繁治（編）『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社

三上剛史 2005「身体論への知識社会学的断章—『身体』という場所」大野道邦・油井清光・竹中克久（編）『身体社会学—フロンティアと応用』世界思想社

Ingold, Tim 2011 "Point, Line, Counterpoint: From Environment to Fluid Space." *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*. Routledge.